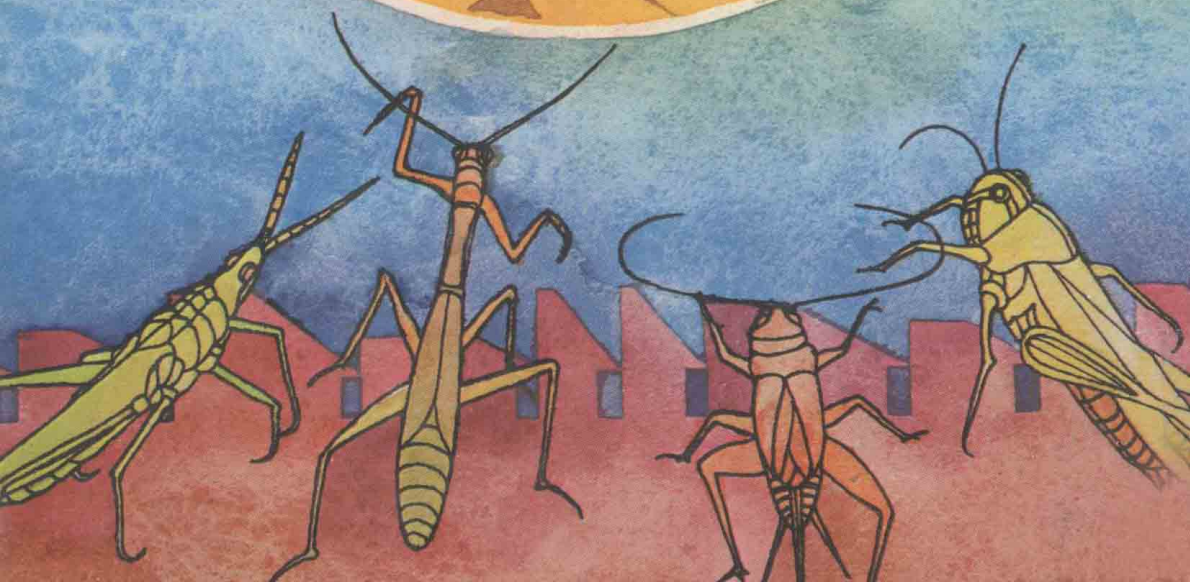


舟崎克彦

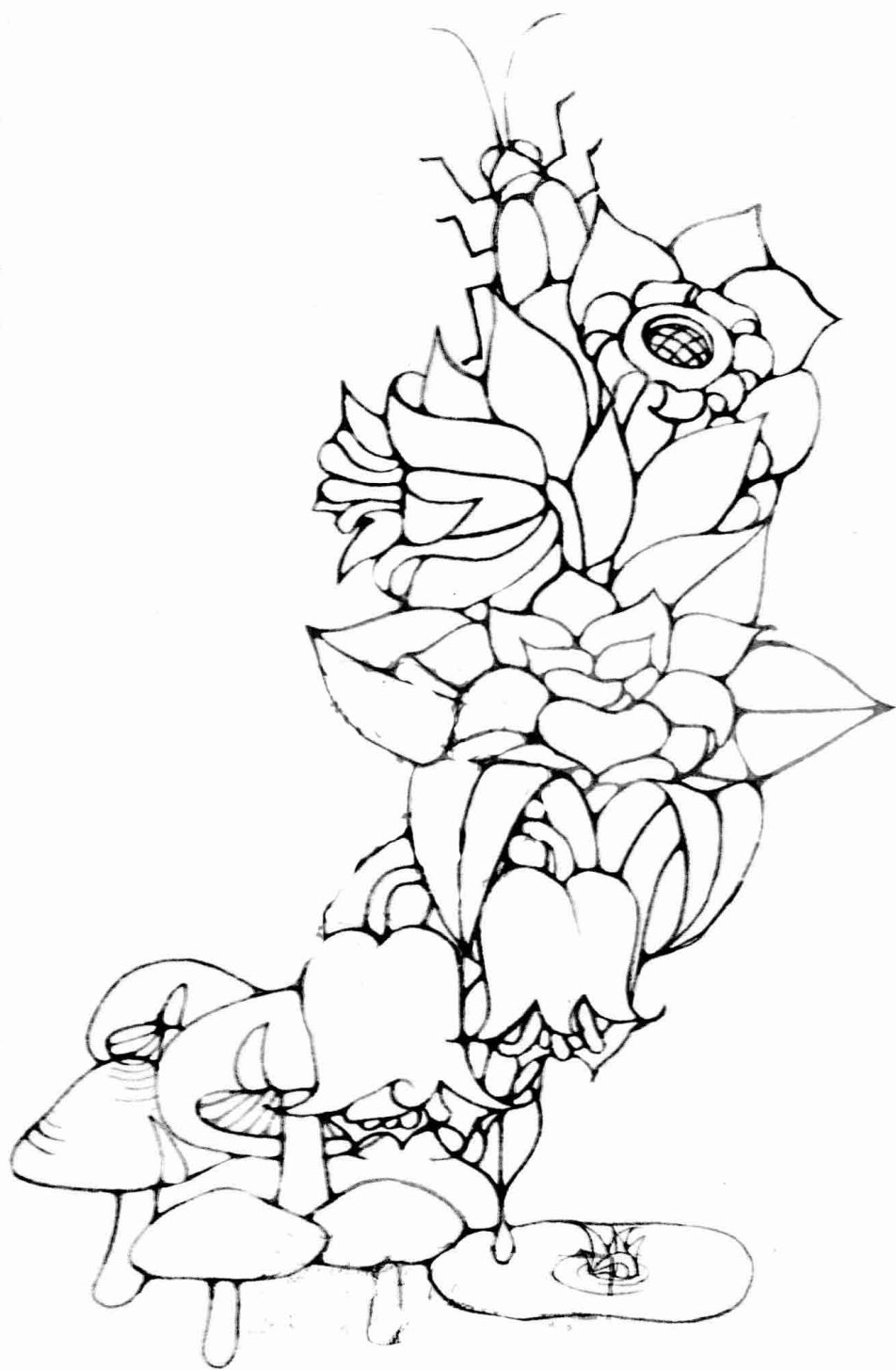
雨の動物園

● 私の博物誌



の動物園

舟崎克彦





少年少女／創作文学

雨の動物園

N. D. C. 913 偕成社 210p. 21cm 1975年

1974年7月 第1刷

1975年7月 第4刷

著者	ふな 舟	ざき 崎	よし 克	ひこ 彦
発行者	今	村	広	

発行所 株式会社 偕成社

東京都新宿区市ケ谷砂土原町3の6

TEL (03) 260—3221 (代) 〒162

振替 東京1352番

本文印刷 新興印刷製本株式会社

多色印刷 小宮山印刷株式会社

製本 文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかいたします。

8393-719280-0904

© 舟崎克彦 1974

published by KAISEI-SHA, printed in Japan.

心の窓をそつとあけると

おもてはいつも雨ふり

いいえ

よく見れば雨ではない それは

古びてきずだらけになった

思い出のフィルムが

ゆっくりと動いているのです

フィルムはうつしだします

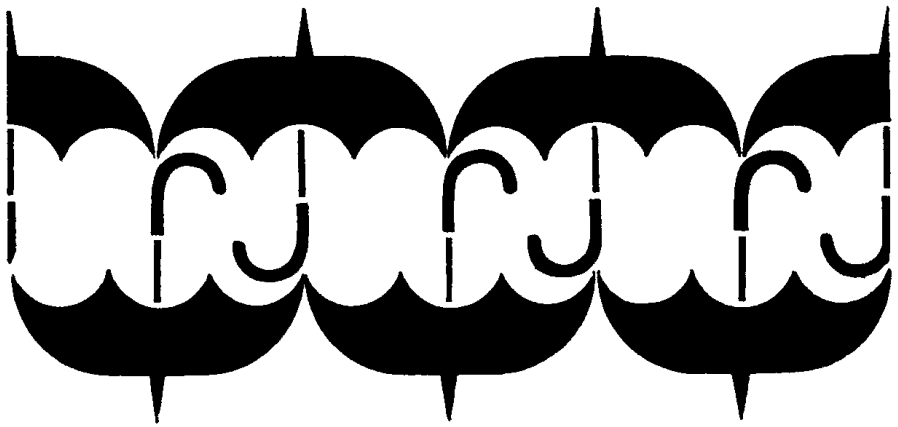
出会って そして

あつという間に消え去ってしまった

なつかしい友だちの姿を

いつも私が遊んでいた

雨の動物園の風景を





雨の動物園／もくじ

ヒキガエル

コウモリ

トカゲとヤモリ

コジュケイ

犬

ウグイス

ヒバリ

カッコウ

6

17

27

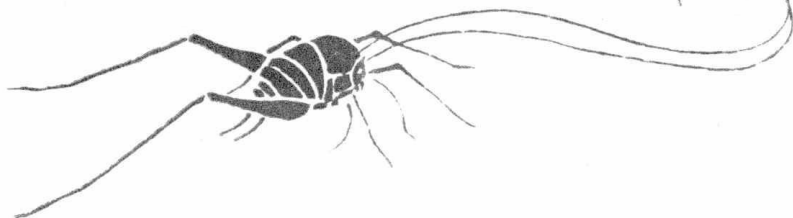
39

49

59

69

84





きくしや きくひん
作者と作品について 矢川澄子

205

エナガ

192

じゅうし まつ きん かちよう
十姉妹・錦華鳥

174

リス

160

カルガモ

141

モグラ

133

鳥かごの家族たち

119

ヤマガラ

107

モズ

97



著者・^{ふなだき}舟崎 ^{よしひこ}克彦

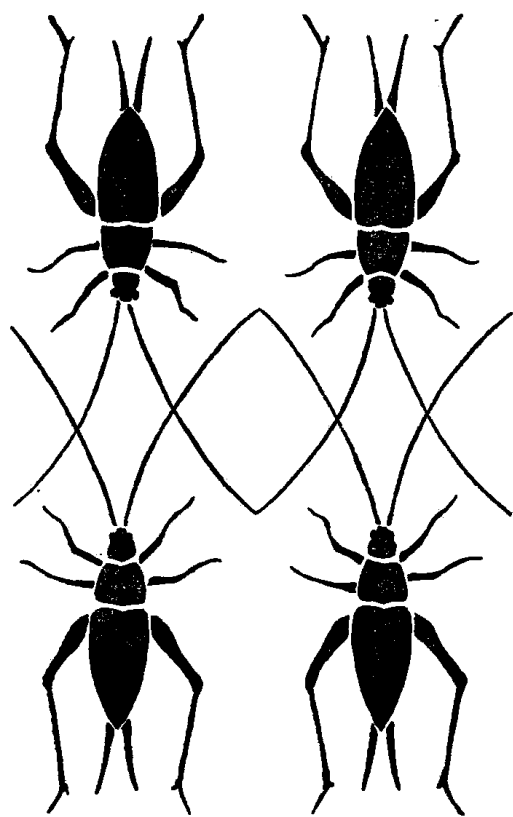
1945年，東京に生まれる。学習院大学卒業。
童話・作詩などの創作活動のほか，さし絵の分野でも活躍（本文中のカットは著者による）。
世界野生生物基金日本委員会会員。主な作品は『トンカチと花將軍』（共著），『ガヤガヤムツリ』，『ぼっぺん先生と帰らずの沼』など。現住所／東京都国分寺市高木町3—24

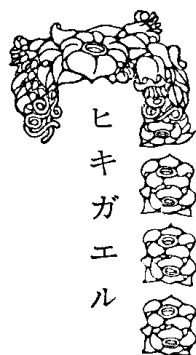
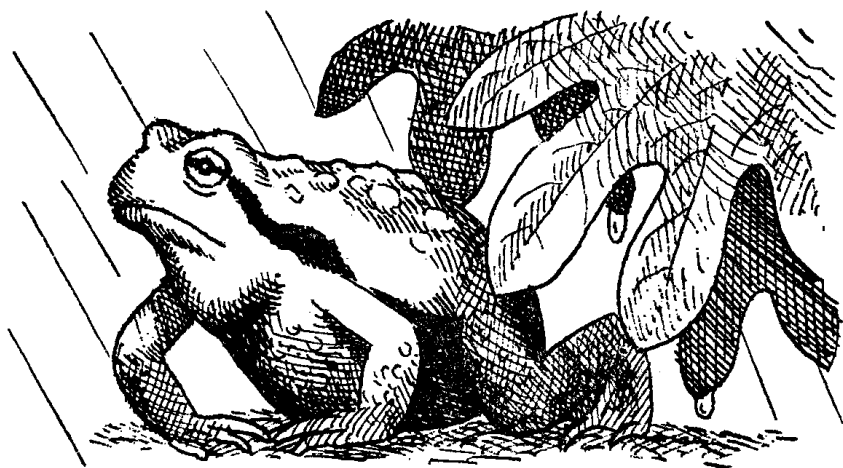
装幀・^{そうてい}装幀 ^{こいずみ}小泉 ^{まさみ}まさみ

1948年，東京に生まれる。多摩美術大学デザイン科卒業。デザイン，イラストの仕事をする一方，現在はシンガー・ソング・ライターとしても活躍。現住所／東京都多摩市連光寺340

雨の動物園

舟崎克彦





たとえばかくれんぼうをしていて、いつもの、
物干し場と垣根のあいだのシュロのしげみでじっ
と息をころしている。

鬼はポーチの向こうの植えこみのなかでもさが
しているのかもしれない。いつまでたっても姿を
見せない。

と、そのうちに、今にも泣きだしそうな灰色の
空から雨が音もなくふりだす。

どうしようかしら……。

「いちぬけたあ」とさけんで家のなかにかげこん
でしまおうか。けれど、さけぶ前に見つかりでも

したらしゃくにさわるし。いや、ひょっとしたら鬼は生け垣の穴をくぐって、とつくに遊びからぬけてしまったのかもしれない。

心ぼそいような、ぞくぞくするような気持ちで光りはじめた地面をながめていると、すぐさきの、ひょうたん池のふちにしげっているモクレンの根かたから、のっそり、のっそりとあらわれる。鬼ではない。わが家の池の主、ヒキガエルである。

彼はまるで子をさがす鬼のように注意ぶかく、伯爵かなにかのようにどうどうと、雨にぬれた庭をよこぎってゆく。この伯爵はばか陽気なパーティーや、心の底まですつきりするようなお天気が好きではない。

だれかと言葉をかわしたり目ませをしただけでも、自分のほこりがきずつけられると思っている。いいや、もしかしたら自分のあまりかっこうのよくない姿を見られるのがいやで、いつのまにかへんくつになってしまったのかもしれない。

だから彼は自分の住所も電話番号もだれにも教えず、だれもふみこまないようなしげみの、しめっぱい下かげにひっそりと暮らしている。

「なに、だれかに会いたくなったらこちらから出かけるさ。」

けれど、彼が散歩したくなるようなじめじめしたいやな日は、みんな戸をしめきつ

てひっそりしているし、彼だつてとくべつだれかに会いたくて出かけるわけでもないのである。

そんなわけで、雨の日の彼はいつも、とりわけ胸をはって、あたりを見下して歩いているように見える。

だが、お天気の良い日の伯爵はいつもみじめだ。

よせばいいのに目と鼻だけを土からだしてあたりのようすをうかがっていると、たちまち子どもたちに見つかってしまう。

彼は罪人のように家から追いたてられ、子どもたちが思いつくかぎりのいたずらの実験台にさせられる。

あわれな伯爵は、ある時は両足をしばられて池をおよがされ、ある時はクロケットのボールのようにころがされ、ある時は胸のわるくなりそうなじりをかけられてだんごにされる。



モ ク レ ン

彼のおじいさんは、自転車の空気入れをおしりからつつこまれ、ふうせんのようにふくらまされて天国にいった。

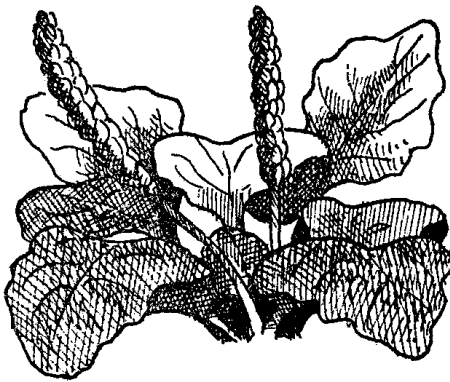
彼のおとうさんはタバコのやにをたらふくごちそうされて、胃をあらうかいもなくこの世を去った。

思えば悲劇の一族である。そこで彼は考えた。この災難をさけるためには死ぬふりをするのがいちばんいい。

子どもたちにひきずりまわされる。彼は死ぬふりをする。と、子どもたちはカエルグサ（オオバコ）の葉をつんできて、彼の体にかぶせて帰るのである。

子どもたちはそうすれば、死んだカエルが何度でも生きかえると信じていた。そうすれば明日もまた「いっしょに楽しく」遊ぶことができる。そしてじっさい次の朝になると、みにくい伯爵の姿は、迷信どおり葉の下からかき消えているのである。

ほんとうに子どもたちの私たちにとって、ヒキ



カエルグサ（オオバコ）

ガエルほどよい遊び相手はなかった。

彼らはまるで、子どもたちになぶられるために神さまがこの世につかわしたのではないかと思えるほどよくいじめられた。

けれど、いじめると見たのはいつも大人たちで、なんでもこわしてみたい年ごろの私たちにとってヒガエルは、いやいやながらもじつとがまんしてその相手をしてくれる、かけがえのない親友だったのである。

そして私たちが彼らを尊敬していた証拠には、どんなにいじめてもけっしてオシッコをひっかけるようなぶじょくはあたえなかった。

やがてむせかえるような夏も終わると、伯爵はぶ厚いむずかしそうな本を小わきにかかえて地下室へ眠りにゆく。

そこまではどんな子どもでも追いかけてはゆけない。

わが家のうらの、雑草がおいしげった原っぱにアキアカネが飛びはじめ。

と、私たちは伯爵のことなど、もうすっかりわすれてこの赤い小さな飛行隊をうち落とすのにむちゅうになる。

私たちはいったん部屋の片すみにしまいこんだモチざおをふたたびいそいそととり

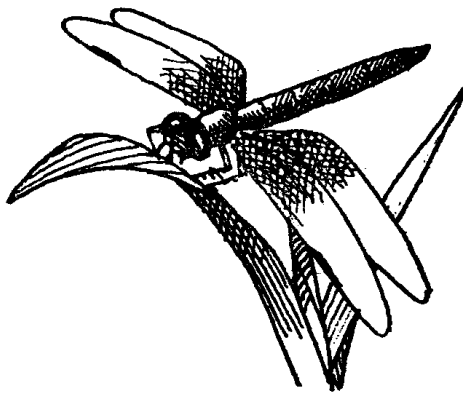
だしてくる。夏休みのあいだに「世界じゅうの」セミをかたっぱしからとりつくした家宝の竹ざおである。

その、小指こゆびほどもないしなやかなさおの先さきに、鼻はなのしぶくなるようなおいのする茶色ちやいろいトリモチをぬりつける。

このモチのつけ方かたがむずかしい。指ゆびにつかずにさおにつけるようにするには、指にすくったモチを親指おやゆびと人差し指ひとさしゆびでつまむようにして、らせん状じようにぬりあげてゆかねばならない。うっすらと、まんべんなくぬる。つけすぎれば、トンボがかかった時にねばりすぎて翅はねをこわしてしまうことになる。

モチをぬり終わると子どもたちは、ちょうど舟ふねのへさきから網あみをうつ漁夫ぎよふがはずみをつけるように、ヒュッヒュッとさおをしならせる。

そしてねらいをつけたアカトンボめがけてふりおろす。が、力いっぱいやってはいけない。さお竹だけの先のしなりを利用りようするのである。そのためには手も



アキアカネ

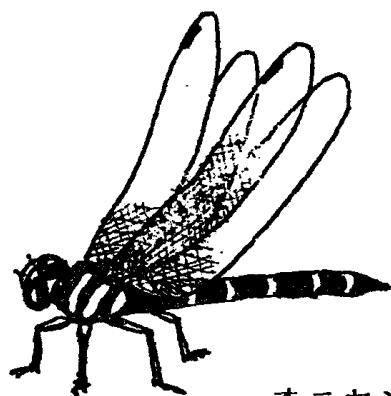
とにすこし力をあつめるだけでじゅうぶんだ。

じょうずな連中^{れんちゆう}はそのひと振り^{ふり}で二、三びきいっぺんにつかまえることができる。そのなかでも運^{うん}のいいやつは夏のなごりのオニヤンマなどを思いがけず手に入れる。

と、私たちはよってたかつて獲物^{えもの}をモチざおからひきはなし、なにをするかというと、ほかのトンボと首^{くび}をすげかえるのである。

ただ大きさがあまりちがってはいけない。オニヤンマとギンヤンマ、シオカラトンボとムギワラトンボ、そしてアカトンボとアカトンボ。にた者^{もの}どうしの首をすげかえられたトンボは、空に放^{はな}たれるとまたなにごとにもなかつたようにどこかへ飛び去^さった。

おもちゃなんかではなく、生きて、血^ちのかよったものたちをもてあそんで自分の思うように作り変^かえる。それは子どもたちにとって目もくらむようなおもしろさだった。造物主^{ぞうぶつしゅ}の作ったもので遊ぶのではない。私たちひとりひとりが造物主^{ぞうぶつしゅ}になって、思



オニヤンマ

うさま新しい生き物を作りだしていたのである。

けれどそれは大人^{おとな}たちの言うように、しよせん残酷^{さんく}ないたずらにすぎなかった。

そんな遊びはいつも、相手^{あいて}の死^しを見ることでおしまになる。いくら草の葉をかげてみても、ほんとうに死んだものはもう二度と動^{うご}こうとしない。

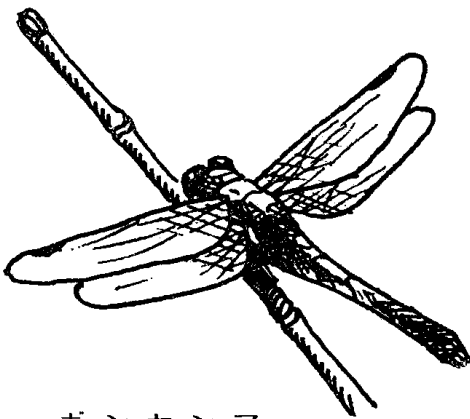
動^{うご}いていたものが動かなくなる。私たちはそこに生^いきていることの意味^{いみ}のようなものを感じた。

秋がすぎ冬がくると、私たちは原っぱにやってくる紙しばいやベーゴマ、メンコ、たこあげなどに熱^{ねつ}中^{ちゆう}しはじめる。

生き物たちの生活^{せいかつ}が「お休み」になって初^{はじ}めて、人間のこしらえた道具^{どうぐ}で遊んだ。

「ウワッハッハッハッ。そこへあらわれたる黄金^{おうごん}バット!!」

紙しばいのおやじさんの名調子^{めいちようし}を聞きながら、二まい五円のものなかの皮^{かわ}のようなせんべいに、わりば



ギンヤンマ

しにすくった五円の水あめ、これをこねてこねてまっ白にしたものをはさんで大切にめながら、私たちは冬の日だまりで黄金バットになった。

もういくつ寝るとお正月。そして雪。

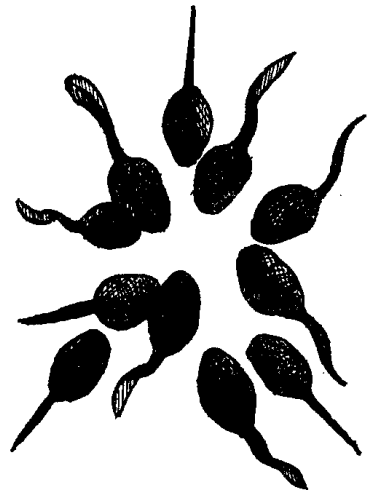
雪だるま。雪合戦。さびしい雪どけ。その下から角をだす新緑の芽。

春はまるで手品師のひるがえすハンカチーフのように、いきなり目の前にあらわれる。

と、私たちは、やっと氷の目かくしをとかれた池に目をやって、あのなつかしい伯爵のことを思い出すのである。

私たちよりひと足さきに春のおとずれを知って起きた伯爵が、こっそりとたくさんだ仕事をそこに見る。

朽ち葉のふかぶかとしずんだ池の底にはいめぐっている、ところてんのような無数のレール。それはヒキガエルの卵だ。



オタマジャクシ